

キリストの光 光のキリスト

年間第9主日 6月1日

(マタイ7・21—27)

「主よ、主よ」と言う者が皆、天の国に入るわけではない。天の父のみ心を行う者だけが天の国に入る。

天の父のみ心とは、助けを必要としている人々に手を差し伸べること。祈るときに合わせた手は、差し伸べるために開かれなければならない。

フィリピンのミンダナオに在住して貧しい子どもたちのために働いている友人と久しぶりに会った。町で働いているフィリピンの人にせひ会いたいという。後ろから押されるような力を強く感じた。

どこに行けば会えるか分からない。いろんな人に電話で尋ねて、一件のパブを教えてもらった。

開かれた手

土曜日の夜のミサが終わった後、友人と二人で出掛けた。店の扉を開いて、迎えに出た人に尋ねた。「いる」と言う。ミンダナオから来た人だったらしいね、と言いながら店に入った。一人の女性が言った。ミンダナオから来ている人はたくさんいるよ。

現地の言葉を話す友人に驚いて、四人の女性が話の輪に加わった。その中の一人がわたしをじっと見つめる。どこかで会ったことがある、と言い出した。話しているうちに六年前に祝福を求められて訪ねた家の隣の人だと気づいた。

友人はバッグに入れて持参していたノートパソコンをいつの間にか出していた。美しいミンダ

ナオの風景や音楽。難民の様子や貧困、病気に悩む人たちの姿。そのような状況にあっても輝く瞳と笑顔の子どもたち…。

わたしたちが店に入る前二人



の女性は店の片隅で話していた。困っている人たちを助きたい。いつか機会があるとしたい、家には古着や文房具を箱に詰めている。が、どのようにして、誰に送ったらいいのか分からない。送る途中でほかの人

の手に渡るのはいやだし…直接に必要としている人たちに渡したい…と思っていた。問題は即、解決した。

一人の女性は自分の村に学校を建てることができれば、と思、コツコツとお金を貯めているという…。

日本人と結婚して家庭を持つている人。一生懸命に子どもを育てている母。家に仕送りをするために一人で働きに来ている人。さまざまな状況で生きている。彼女たちは口をそろえて言う。日本は豊かな国でも貧しい国。心を開くことができないのが寂しい…。

「神父さん、わたしはもう十八年もミサに行つてません。

悪い信者です。でもお祈りは毎日しています。神さまに祈ります。感謝しています。今度できたらミサに行きます」

イエスは言われた。天の国は…あなたがたの心の中にある。あの夜、わたしたちは「天国」にいたような気がした。

手をしっかりと合わせて一生懸命に祈るその手の指を、神はやさしく一本一本開いてくれる。

(山元眞||福岡教区司祭ノカット||高崎紀子)

今週の福音

2日	・月マルコ	12	・1	12
3日	・火マルコ	12	・13	17
4日	・水マルコ	12	・18	27
5日	・木マルコ	12	・28	b 34
6日	・金マルコ	12	・35	37
7日	・土マルコ	12	・38	44